
父と娘の繋がり

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父と娘の繋がり

【Nコード】

N4186K

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

父という存在は嫌い。
私と母を決して幸せにしない。
そう思っていた。

父と娘の繋がり 1

私の母は今の父親と結婚したすぐ後に交通事故で亡くなった。
あっさり死んでいった母を少し恨んだ。

ちょうど反抗期が重なっていた私。

何もかもイライラとして受け止める。

そして、その義理の父となった人も驚きである。

まさかホストとは思わなかった。

初めてあったときにびっくりした。

こんなに若いのに私の父親なんて信じたくなかった。

二十歳は過ぎてるもののまだ少し幼い。

どうして母と結婚なんてしたのかわからない。

そして、そんなことどうでもよかった。

ほとんど家になんて帰らないし。

私の友達に荒れてる子が多い。

だから私もそうなってしまったわけで、なりたくなっただんじや
ないと今でも心で言い訳していた。

そして、友達と呼んでる友達はただのつるんでいる奴らである。

なんてバカバカしいのだろうと自分でも思う。

染まった髪の毛。

タバコの香り。

ギリギリの爪と携帯。

時々カラーコンタクト。

何が楽しいのだろうか。

鏡を見つめるのが嫌になった。

私は小心者なんだと自覚するから。

「始めまして。君の父になる海崎かいざき 賢斗けんとです。これからよろしくね。

そう言っ て笑顔を見せてくる海崎。
きつと笑いなれてるんだろ う。

こんな男が母は好きなんだ。

年下ねー。

本当に若い。

「どーも。」

無表情で応える。

満面の笑顔なんて忘れた。

作り笑いなんて慣れてる。

もう、どうでもいい。

そう感じるようになってきた。

まだ少ししか生きてないのに、諦めている人生。

何もかもがつまらない。

そう感じた。

これから他人と生活するくらいなら一人暮らしのほうが楽なよう
な気がする。

そして、その男はこう言った。

「君恥ずかしくないの？ そんな格好。」

私の頭から足の先まで見つめてそう言った。

反抗期の私は怒った。

心が見透かされて、凶星だったからだ。

そして、同時に「何故お前に言われなきゃならないんだ！ー」と
も思った。

「ほつとけ！ーうぜーんだよ。父親ぶりやがって。今更新しい父親
なんかいらねえーんだよ！ー母親がいなくなつて清々したのによ！
！ー！どうして、他人のお前なんかそんなこと言われなきゃなん
ねんだよ！ー！」

そういつた瞬間だった。

バンツ！ー！

頬にジーンとした痛みが走った。

「優子^{はは}さんに謝れ！ー！ー！育ててもらつた癖にただの反抗期でそんなこと言いやがって！ー！お前は恥を知らねーのか！ー！ー！」

私はその場から逃げ出した。

家から思いっきり飛び出た。

涙が出てきた。

悔しい。

そして、苦しかった。

私は母の墓に歩いた。

母の墓の前で自分の気持ち告げた。

「お母さん、海崎さんに怒られちゃった。ごめんね。こんな格好だ
けど…本当はね…お母さんのこと大好きだったんだよ？でも、友達
に嫌われたらいじめにあうと思つて勇気が出せないんだ。だから、
もう少しだけ、この格好でいるかもしれないけど。でも…信じてほ
しい。本当はこんな自分大嫌いなんだ。

お母さんひどいこと言つたままなのに。どうして？どうして、死ん

じやったの??!!あんなに元気だったじゃん!!どうしてよ…。」

私は泣いた。

本当はうらやましかったんだ。

いつも元気で悩みなんてなさそうなお母さんが。

本当の友達がほしかった。

でも、友達Ⅱつるむ仲間になってしまつて。

思い通りになれない自分にイラついていただけだった。

今更気づいてどうしたらいいのかわからなかった。

少したつて、私は泣きやんでお母さんのお墓の前でたたずんでいるときだった。

「君はこの方の娘さんかい？」

一人の優しそうなおじいさんが私に尋ねてきた。

私は少し途惑いながら頷いた。

敬語は苦手だから。

「いつも若い男の人が来ていたよ。今日だつて、着ていた。息子さんかい？」

おじいさんの言葉に驚いた。

耳を疑った。

私は少したつて首を横にブンブンと振った。

「私…だけです。多分…義理の父だと…思います。」

私はうつむきながらそうつぶやいた。

ホストの男なんか軽そうに見えた。

きつとまた私を捨てるのだらうと思っている。

前の男は誠実そうな人。

しかし、お金ばかり使って、結局すごく苦労していた。

お母さんは毎日泣いていた。

その横でぐっすりと眠れるはずがなく、いつも隈をつくって小学校に行っていたのを覚えている。

そして離婚して何年も経っていたから結婚なんてしないと思っていた。

なのに、何故か心の隅に裏切られた思いが出てきた。
お腹のあたりがキリツといたくなったような気がした。

「そうかい。とても優しい方なんだね。本当に大切そうに話しかけていたよ。いつまでもなかよくね。」

おじいさんはそう言い残して行ってしまった。

「大切そう……か。」

私はお母さんのお墓を見つめて無意識のうちにそうつぶやいていた。

お母さんを何でそんなに大事に思っただろう？

私はゆっくり歩きながら家に帰ろうとしていた。

その時だった。

「お前、何処まで行ってたんだよ！！心配したじゃないか。」

息を切らしながら私の前に立った。

あの男。

黒髪にワックスをつけて少し立たせて、耳にはピアス、首に下がる大きな星のネックレス、手首にはシルバーのブレスレット、パー

カーの上にコートを着てジーパンを穿いている。

ただのチンピラにしか見えないような姿をしていて顔立ちが綺麗。
どうしてこんなに完璧な体や顔になるのかが知りたくなる。

「どうしてお母さんを好きになつたの？」

私は真っ直ぐに海崎を見つめてそう尋ねた。

知りたかつたんだ。

ねえ、人を信じれるようになるかな？

少しは人生が楽しいと思えるようになるかな？

あなたに聞きたかつたの。

あなたはお母さんのどんなところを見てきたの？

父と娘の繋がり2

君のお母さんの優子さんに逢った日は雨だった。

優子さんは道端で倒れていた。

すごい熱だったから、急いで俺の家に運んだ。

優子さんは起きてすぐに君の名前を出して俺の家を出て行こうとした。

そんなところを見て色々聞いたけど、中々口を開こうとしないんだ。

きつとそれぐらい大事に思ってるんだろうとすぐにわかった。

そして、徐々に君のことを聞いてきたけど、君を悪く言う言葉は何一つ出てこなかったよ。

なのに、君はそう言ったからついカツとなってごめん。

そう彼は言った。

そして、少し間をあけてつぶやくように言った。

「彼女は立派だった。二十歳で君を生んでほとんど彼女が背負ってきたんだろう。あんなに辛そうなのに、いつも笑顔で。俺は悔しかったよ。だから、少しでも役に立ちたい。そう思ったらどんどん彼女を好きになっていった。」

私の頬には涙が溢れる程流れていた。

唇を思いつきりかみ締めた。

後悔という文字が頭を支配する。

もっと優しくしていれば、もっと素直になってればお母さんが死ななくてすんだのに。

ポンポン

私の頭に大きくあたったかい手の平が乗った。
やっぱり男の人なんだ。
そう感じた。

「ごめんね。海崎さん。」

私はそう言って自分の部屋に戻った。

目が赤くはれて痛くなるほど泣いた。
鼻が詰まって赤くなるほど泣いた。
せきが出てのどが痛くなった。
今の私には関係なかった。

私はそれ以来タバコを止めた。
変わった私を友達はいじめたりはしなかった。
むしろ、「じゃあ、うちらも止めようか。」とみんなで止めた。
簡単じゃなかったけど。
頑張つてみんな協力しあったかいがあつて止められた。
ほとんどがあっさりとしてきたときだった。

見たくない文字が書いてあるプリントが配られた。

「授業参観……。」

私は母がいないからあの義理の父親が来るのかと思うと心がモヤ

ッとした。

母親ばかりのところにホストの父親なんて目立ちすぎて恥ずかしい。

とても平気でなんて教室に居れないだろう。

静かにしろと言われて静かでいれる大人なんてこの高校にはいない。

私はムスツとした顔で見つめていた。

友達達は母親が見に来るということを嫌がっていた。

きっと昔の私ならそう思うだろう。

私はいつの間にか反抗期を過ぎていたらしい。

イライラがなくなった。

それもきつとあの義理の父親のおかげなのだろう。

ありがとう。

そう思った。

さあ、どうしよう。

少し考えて思いついたのが…

よし、この手紙は捨てよう。という考えになった。

私は自分の部屋のゴミ箱の奥底に捨てた。

きつと奥底なら見つからないだろう。その考えが甘かったとしての
のは数日後だった。

「おい。この手紙はなんだ。」

そう言って目の前に突きつけられた。

その手紙の文字を見て驚いた。

心臓が大きく脈を打った。

「こつこつことはちゃんと言え。」

すごい命令口調の本性。

お母さんにもこつこつだったのかはあえて聞かないことにしている。
何故か？

自分でもわからないのだ。

「どうして…。」

私はうつむきながらそう尋ねた。

知られたくなかった。

何故か女子達にキヤーキヤー言われそうで嫌だったから。

きつとこのときにもう衝動はおきていた。

なのに、私はまだ気づいてなかった。

「ゴミを捨てようとしたときに袋から透けて見えた。気づいてなかったらどうしたんだ？」

眉間に皺がよっているのがすぐにわかった。

そんなに怒ることではないような気がするのだが。

プライドでもあるのだろうか？

私はムスツとしながら意地を張った。

「そのまま。」

「そのままってどういう意味だよ？」

きつとイラッとしたのだろう。

怒っている声をしている。

私は目を逸らしていたから本当に怒っているのかはわからなかった。

「そんな怒ることじゃないでしょ？別にいいじゃん。」

私は自分に呆れた。

本当に子供なんだと自覚した。

「俺が居たら嫌なのか？」

その言葉に口が勝手に閉じた。

海崎さんの顔を見てすごく切なくなった。

寂しそうにしゅんとした顔。

可愛いと思ってしまった。

すごく顔が熱くなった。

私はその時何故か傷ついた。

きっと女の人にはこうやって飴と鞭を使い分けて苦勞することなく生きてきたのだと頭に浮かんだ。

その瞬間私は胸が苦しくなった。

「嫌。あんたが教室にいたら目立つじゃん。恥ずかしい。」

私はリビングにそう言い残して自分の部屋がある二階に上がった。

バタンッ

扉を閉めた途端涙が溢れ出した。

こんなに泣き虫だったんだ私。

バカみたい。

何でこんなことで泣くの？

意味わかんない。

海崎さんにあんたって言っちゃった。
ごめんなさい。

私はそれ以来海崎さんを避けるようになった。

そして、その当日…

「ねえ、あれって麗菜れいなのお父さん？ 以外に普通だね。」

そう言っ指を指された義理の父は眼鏡をかけて髪の毛も少し乱して安めのスーツを着ていた。

見てすぐにわかった。

優しい。

私は走って腕を引っ張って目立たないところに走った。

そして、誰もいないところで抱きついた。

嬉しかった。

「海崎さん。ありがとう。」

私は満面の笑みでそう言った。

早く言いたかった。

ちゃんと言いたかった。

あなたを知っていくうちに恋をした。

ねえ、どうして普通の恋じゃないのかな？

あなたを知ってくうちに絡んでく糸。

いつか切れるのだろうか？

ねえ、お母さん。

お母さんはどうして海崎さんを好きになったの？

父と娘の繋がり3

授業参観は無事に終わった。

海崎さんは優しい。

そう気づいたときにはもう遅かった。

後戻りできないほど恋に落ちていた。

家に帰ってきたらごはんを作って、海崎さんが帰ってきたら一緒にごはんを食べているんなことを話す。

そうやって過ごしてきてしまっただで後悔した。

私はバカだ。

そう気づいた。

海崎さんのことはお父さんと呼べないその思いが胸いっぱい広がっている。

「海崎さん。」

私はお母さんの写真に目もくれず海崎さん呼び止めた。
ちやうどパソコンの仕事の合間だった。

「ん？寝れねえーのか？」

優しく声をかけてくれる海崎さん。
私は言おうとしてしまった。

「あの…」

その瞬間だった。

ガシャンッ

いきなり大きな音がした。

私はそのほうを見て鼓動が早くなったのを感じた。

「あ、優子さんの写真が。でも何で？って、おい！！！」

私は二階に戻った。

私は荒い息をした。

吸っても吸っても酸素が肺に入ってこないような気がした。
頭を抱えて体を丸めた。
頬に大粒の涙が伝った。

私は家族の輪を壊そうとしている。

やっと仲良くなれた家族をまた手放すの？

私は歯を食い縛った。

お母さんごめん。

私辛いよ。

私はそれから本当の笑顔がわからなくなった。

私は海崎さんのことをお父さんと言うようになった。

もう忘れよう。

きつとこの気持ちは夢だ。

そう思い込んでいればきつといつしかこの気持ちはなくなる、そう考えた。

でも、何一ついいことなんてなかった。

むしろ、自分を苦しめた。

そして、無意識のうちに手首にカミソリを当てていた。

気が薄くなっていく。

そう感じた。

これが死ぬってことなんだ。

頬を伝う涙。

きつと目が開いた時は地獄なんだろうな。

ねえ、お母さんはどこにいるの？

もし、今お母さんに逢えるならどこにいてもかまわない。

お母さんに謝りたいよ。

ごめんね。

お母さん。

父と娘の繋がり5

「あなたが元気でいてくれることが一番よ。あなたがいなくなった
ら賢斗君が可哀想でしょ。賢斗君にはあなたが必要なんだと思う。
だから、私のことは気にしないでいいわよ。」

お母さんの声が優しく聞こえた。

目が開いた時。

白い空間だった。

「ここは？」

私はつぶやいた。

「病院だ。このバカ！！！！」

私は戸惑っていた。

私は死んだはず。

「ねえ、どうして死なせてくれなかったの！！！！こんなに辛いな
ら死んだほうがましよ！！！！」

私は叫んだ。

死んだほうがよかった。

あなたを失うよりもそのほうが軽かったような気がした。

「……………でくれ。」

「え？」

私は何を言っているかわからなかったので首をかしげた。
そして、同時に驚いた。

「居なくならないでくれ。」

「え？どうして泣いてるの？海崎さん。」

久しぶりに呼んだ名前は微かに震えた。
いつも優しく包んでくれるあなただったから。

「俺は小さい頃に交通事故で父と母を亡くした。そして、小学生のときにおじいさんが亡くなって、おばあさんも中学生のときに……
とどろき周りがいなくなってしまうようで、おかしくなりそうだった。その後はおじさんや、おばさん、いろんな人達の家を回った。そして、やっと働けるようになって自分で金を稼げるようになって優子さんにあった。でも、その日も長く続かなかった。もう誰もいなくならないでほしい。……………いなく……ならないで……ほしい。」

かすれながら一生懸命訴えてくる海崎さんがすごく愛しくて、切なくなった。

私は思いつきり抱きしめた。

小さい頃からいろんな経験をしてきた海崎さんはすべてを自分の責任として背負っていこうとしているのだろう。

ねえ、私を頼って？

支えられないときがくるかもしれない。

でも、そんなときは頑張っ^て一緒に考えよ？

何もいらない。

あなただけで十分だよ。

お母さんごめんね。

そして、ありがとう。

お母さんがいてくれたから私がここにいる。

そして、海崎さんという人に出会えた。

ありがとう。

数年後…

「好きだ。優子さんには悪いけど。今度一緒にお墓参りに行こう？」

あなたは本当に申し訳なさそうだったけど。

ここにくるまですごく時間がかかった。

でも、あなたに真っ直ぐ向かっていた。

だってあなたしかいないんだもん。

手首の傷はまだ痛々しく残ってる。

でも、あなたをこれほど想ってる証拠でしょ？

私は微笑んだ。

そして、お母さんが言ってくれたあの言葉を伝えた。

「あなたには私が必要なんだよだって。お母さんが。」

私は少し生意気に、そう言った。

大好きだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4186k/>

父と娘の繋がり

2010年10月20日20時03分発行